症例報告

顔面外傷治療後上口唇変形をきたした1例に対する治療経験

近畿大学医学部形成外科

松 永 和 秀 朝 村 真 一 磯 貝 典 孝

Treatment of Posttraumatic Upper Lip Deformation : A Case Report

Kazuhide MATSUNAGA, Shinichi ASAMURA and Noritaka ISOGAI

Department of Plastic and Reconstructive Surgery, Kinki University, School of Medicine

唇裂術後変形様の外傷性上口唇変形をきたした成人男性1例の治療を経験した。症例は、40歳、男性。飲酒後、自転車乗車中、転倒し、左上口唇の裂挫創をきたし、同日近医に救急搬送され、縫合処置を受けた。その後、瘢痕拘縮を伴う上口唇変形を主訴に、受傷4カ月目当科紹介初診となった。初診時所見は、左赤唇の鼻孔部への挙上偏位、左キューピット弓の消失、左白唇の短縮を認めた。創跡およびその周囲組織の瘢痕拘縮が著明であったため、トラニラスト内服とマイクロポアテープ固定療法の初期治療を行い、受傷6カ月目に手術を施行した。手術は、口唇裂形成術で用いられるCronin法に準じる方法で、口唇形成術を施行した。術後1年目現在、赤唇および白唇の形態は概ね良好である。以上のことから、唇裂術後変形様の外傷性上口唇変形をきたした症例に対し、Cronin法は有用な方法の一つであると考ええる。

索引用語：外傷性変形 (posttraumatic deformation)、上口唇 (upper lip)、クローニン法 (cronin method)

緒 言

外傷による上口唇の変形は、機能面はもちろん整容面からも適切な治療が必要と考える¹⁾²⁾。今回、唇裂術後変形様の外傷性上口唇変形をきたした成人男性1例の治療を経験したので報告する。

症 例

症 例：40歳、男性。

現病歴：2007年○月○日飲酒後、自転車乗車中、意識消失し顔面から転倒した。その際、左上口唇の裂挫創をきたし、同日近医に救急搬送され、縫合処置を受けた。その後、瘢痕拘縮を伴う上口唇変形を主訴に、受傷4カ月目当科紹介初診となった。

現 症：初診時の所見をFig. 1に示した。左赤唇が鼻孔部へ挙上偏位し、左キューピット弓が消

失していた。また左白唇が短縮し、左鼻孔底まで瘢痕拘縮が及んでいた。

Fig. 1 Facial view : 4th months after injury.

Fig. 2 Operative findings : The design of skin incision.

Fig. 3 Operative findings.

A : Cicatrectomy

B : Suture of orbicularis oris muscle

治療および経過

受傷4カ月目につき、創跡およびその周囲組織の瘢痕拘縮が著明で、外科的侵襲は時期が早いと判断し、トラニラスト内服療法とマイクロポアテープ固定療法を初期治療として行った³⁾。その後、外来にて経過観察し、創跡の瘢痕拘縮が改善した受傷6カ月目に口唇形成術を施行した。手術は、1) 赤唇の形態修正、2) 白唇の短縮改善、3) 口輪筋の正常解剖位置への整復を留意し、口唇裂形成術で用いられるCronin法に準じる方法で、口唇形成術を施行した⁴⁾⁵⁾。Fig. 2A, Bに切開線とその模式図を示した。赤唇については、キューピット弓

の位置およびキューピット弓から口角の長さを左右対称となるようにデザインした。白唇については、鼻孔底からキューピット弓の長さがほぼ左右等しくなるようにデザインした。Fig. 3Aは、口唇および口輪筋を切除した所見である。まず、口輪筋を正常解剖位置に整復縫合し (Fig. 3B)、最後に、真皮縫合、皮膚縫合を行い、終了とした (Fig. 4A)。術後治療は、3カ月間トラニラスト内服療法とマイクロポアテープ固定療法を施行した³⁾。術後1年目現在の局所所見は、左赤唇が右と比較すると厚みがあるが、赤唇および白唇の形態は概ね良好である (Fig. 4B)。

Fig. 4 Facial view.

A : Right after operation

B : 1 year after operation

考 察

外傷による上唇の変形は、機能面はもちろん整容面からも適切な治療が必要と考える。今回、唇裂術後変形様の外傷性上唇変形をきたした稀な成人男性1例の治療を経験した。患者は、当科に受傷4カ月目上唇の変形を主訴に来院した。初診時の上唇の顕著な変形から推測すると、患者は飲酒後、自転車乗車中、意識消失し転倒したため、局所に重度な上唇の外傷を負ったのではないかと考える。受傷後、すぐに近医に救急搬送され、縫合処置を受けた。その際、一部の皮膚欠損が予想されたが、応急的に一次閉鎖したのではないかと考える。緊急時の対処としては、妥当であったと考えるが、顔面とくに、口唇の皮膚欠損症例に対しては、顔貌の変形をきたす可能性が高い¹⁾²⁾、応急処置後、すぐに形成外科もしくは口腔外科などの専門施設の受診を勧めることも一つの方法ではなかったかと考える。

次に、患者の治療方針についてであるが、患者は40歳、男性で、社会的な背景を考慮すると、当科初診時すぐに、口唇形成術を計画してもよかったが、創跡の瘢痕拘縮が顕著で、外科的侵襲を加えるには時期が早いと判断したこと、そして、当科初診時までトラニラスト内服療法とマイクロポアテープ固定療法を行っていなかったことなどから、まず、初期治療としてトラニラスト内服療法とマイクロポアテープ固定療法を施行した³⁾。そ

して、創跡の瘢痕拘縮改善が概ねみられた最短の時期である受傷6カ月目に、口唇形成術を施行した。手術方法については、上唇変形が唇裂術後変形様であったため、片側口唇裂形成術に準じた方法を予定した。片側口唇裂形成術には、Veau法、Le Mesurier法、Tennison法、Randall法、Millard法、Cronin法などがある⁴⁾。長さの計測および設計が比較的容易であることや当科の片側口唇形成術で主に用いている方法などから考慮し、今回はCronin法を選択した⁴⁾⁵⁾。一般に、Cronin法は、三角弁が挿入される患側の白唇の高さを術後の成長を見越して、健側より1mm短くするが⁴⁾、本症例は成人であったため、鼻孔底からキューピット弓までの長さは、健側とほぼ同じ長さに設定した。また、口腔粘膜の処理については、口腔粘膜側まで、創跡や瘢痕拘縮がなかったため、口腔粘膜は切除せず温存した。術後経過については、術後1年目現在、左赤唇は右と比較すると厚みがあるが、赤唇および白唇の形態は概ね良好で、患者は、マスクなしで、日常生活を送ることが可能となっている。以上のことから、唇裂術後変形様の外傷性上唇変形をきたした症例に対し、Cronin法は有用な方法の一つであると考えられる。

結 語

唇裂術後変形様の外傷性上唇変形をきたした成人男性1例の治療を経験した。左赤唇の鼻孔部への挙上偏位、左キューピット弓の消失、左白唇

の短縮を認めた。口唇裂形成術で用いられる Cronin法に準じる方法で、口唇形成術を施行した。術後1年目現在、赤唇および白唇の形態は概ね良好である。以上のことから、唇裂術後変形様の外傷性上口唇変形をきたした症例に対し、Cronin法は有用な方法の一つであると考ええる。

謝 辞

稿を終えるにあたり、種々ご指導いただきました近畿大学医学部形成外科非常勤講師笹栗正明先生に心より感謝の意を表します。

本論文の要旨は第33回日本外科系連合学会（平成20年6月、浦安市）において発表した。

参考文献

- 1) 田邊裕美, 櫻井裕之, 野崎幹弘: 特集/縫合の基本

手技 口唇, 口蓋, 筋肉, 頬粘膜の縫合. PEPARS 14: 39-44, 2007

- 2) 小坂正明, 溝口貴之, 橋本隆宏: 特集/新鮮顔面外傷診療マニュアル 口唇・歯牙・口腔損傷 1) 口唇・軟部組織整復. PEPARS 4: 55-60, 2005
- 3) 橋本隆宏, 松永和秀, 朝村真一他: 特集/縫合の基本手技 前額・頬部の縫合. PEPARS 14: 45-50, 2007
- 4) 香月 武, 後藤昌昭: ATLAS OF CLEFT LIP SURGERY 唇裂手術アトラス. 1版, クインテッセンス出版, 東京, 2002, p1-9
- 5) 香月 武, 後藤昌昭: ATLAS OF CLEFT LIP SURGERY 唇裂手術アトラス. 1版, クインテッセンス出版, 東京, 2002, p29-54